ウラル学会通信

第 63 号
2007 年４月発行

第 34 回ウラル学会研究大会研究発表者の募集について

第 34 回の研究大会・総会は、来る７月７日(土)に東京大学(本郷キャンパス)で開催いたします。研究発表をご希望の方は、５月 20 日までに発表題目を事務局(佐久間)までご連絡ください。希望者多数の場合は、事務局の方で調整させていただきます。

事務局便り

1. 第 33 回ウラル学会研究大会･総会について

第 33 回の研究大会・総会は、昨年７月８日(土)、大阪外国語大学で開催され、予定通り無事終了いたしました。発表者は以下の６名の方々です。

大西耕二(新潟大学)
　ウラル語族とオーストロネシア語族の語頭子音対応法則とウラル語族の起源
倉橋　農(京都大学大学院)
　ハンガリー語主節と分詞節の語順：特に否定辞と動詞接頭辞を含む場合
松村一登(東京大学)
　新しいバルト・フィン語《メアンキエリ語》について
高田佳代子(大阪外国語大学)
　Budapesti Iskola ― ハンガリーにおけるドキュメンタリー映画の展開 ―
岡本真理(大阪外国語大学)
　世界のハンガリー語教育における日本、日本の外国語教育におけるハンガリー語
　― 大阪外国語大学から眺めて
藤家洋昭(大阪外国語大学)
　大阪外国語大学ｅラーニング・プロジェクト

2.　ウラル学会 2005 年度(2005 年 4 月 1 日～2006 年 3 月 31 日)会計報告

収　入		支　出	
前年度より繰越	687,572	通信費	11,190
会費	206,000	消耗品	1,655
郵便貯金利子	21		
計	893,593	計	12,845
		次年度へ繰越	880,748

学会の運営は皆様からの会費によって成り立っています。ご協力のほどよろしくお願いいたします。過去に未納分がある方は、合わせてご納入いただければ幸いです。なお、年 3,000 円の普通会費の他、一口 5,000 円で維持会費も募っております。ウラル学会の一層の発展のため、ぜひご協力をお願いいたします。維持会費ご納入の際は、お手数ですが、振込用紙に口数をお書き添えください。

会費払込先: 郵便振替口座 00870-9-120029 ウラル学会

3.　ウラル学会役員の改選について

役員のうち、監査委員の西澤龍生氏より退会願いが提出されたため、後任に荻島崇氏が選出されました。このことに伴い、荻島崇氏は理事を退任いたしました。

4.　ウラリカ14号について

ウラリカ 14 号が刊行されました。既に皆様のお手元に届いているかと存じますが、もしまだ届いていないという方がおられましたら、事務局(佐久間)までお知らせください。

なお、15 号からは編集体制が変わります。編集委員会の委員長は松村理事、編集委員は小川誉子美、庄司博史、千葉庄寿、吉田欣吾の各氏です。また、査読委員は、投稿があった時点で別途委嘱されます。投稿規定につきましては、決まり次第お知らせいたします。

5.　学会ホームページについて

ホームページのアドレスは http://www.ural-gakkai.jp です。ぜひ一度ご覧ください。内容はだんだんと充実させていきたいと考えておりますが、内容についてご意見などございましたら、松村理事(kazuto@tooyoo.l.u-tokyo.ac.jp)あるいは事務局までお願いいたします。

通信は添付ファイルで送ることもできます。郵送は不要という方は、お知らせください
また、転居など異動が生じた場合は、お手数ですが事務局までご一報ください。

[ウラル学会役員]

会長	井上紘一
会長補佐	柴田 正
理事	池田哲郎、佐久間淳一(通信担当)、庄司博史、深谷志寿、 松村一登(学会ホームページ担当)、早稲田みか(会計担当)
幹事	田代直也、千葉庄寿、吉田欣吾
会計監査	石本礼子、荻島崇

[ウラル学会事務所]

〒573-0195 大阪府枚方市穂谷 1-10-1
関西外国語大学国際言語学部　井上紘一 研究室

[ウラル学会事務局(佐久間淳一)]

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学文学研究科言語学研究室内
tel. 052-789-2275
fax. 052-789-2272
e-mail　jsakuma@lit.nagoya-u.ac.jp

ウラル語族とオーストロネシア語族の語頭子音対応法則とウラル語族の起源

大西耕二 (新潟大学)

ウラル語族(URA)は系統不明である。Eurasia の多くの言語群がオーストロネシア語族(AN)の様々な分枝に由来する可能性が最近強く示唆されている(Ohnishi, "Evolution of Mongoloid Languages", Shokado, Kyoto, 1999)。URA や印欧語族は AN との子音対応関係がよく保存されている傾向があり、まず、URA の全ての語頭子音について、AN の語頭子音との子音対応法則の確立を目指した。K. Re€dei (1988)の"Uralisches Etymologisches Woeterbuch (Bde I-III), Harrassowitz" のウラル語語彙や再構築語彙を D.T.Tryon (ed.) (1955) の"Comparative Austronesian Dictionary (Parts I - IV)" にリストされている AN の 80 言語の約 1200 項目の語彙と詳細比較し、約 110 項目についての同祖語彙(cognate)の関係を抽出した。Finnish (Finn.)と Hungarian (Hung.)とウラル祖語(pU)の語頭子音を基盤としながら、 ([Finn.] p-, [Hung.] f-; [pU] *p-) = (p-, f-; *p-) 等の子音の組み合わせを指標としてウラル語子音を分類し、対応する同祖語彙関係から AN 語彙との矛盾を含まない 27 個の子音対応法則を導出した。子音対応法則は Finn.の全てと pMP/pAN のほぼ全ての子音に渡り、pAN または pMP との間に 27 個の規則的対応法則が得られ、例外のない法則としてほぼ厳密に成立する。URA との cognates の各項目における最酷似の形態の語彙は、80 AN 言語のうちの Sulawesi 語群(West.MP; Wolio, Bugis, etc.)と West. Oceanic(Yabem, Tolai, etc.) に高頻度で見られ、pU はこれらの語群または proto-Oceanic などに近縁な言語に由来して起源したと結論された。

Table 1. Word-initial consonant-correspondence laws between Uralic and Austronesian.

Abbreviations: pXX = proto-XX, pU=proto-Uralic, FU=Finno-Ugric,FV=Finno-Volgaic ; pAN= p-Austronesian, pMP = p-Malayo-Polynesian, OC = Oceanic, W.OC = Western OC, Finn.=Finnish,Hung.=Hungarian,FP=Finno-Permic

1. [Finn.] m- || ([Finn.] m-, [Hung.] m-;[pU] *m-) < [pMP, pAN] *m- ||| 2. [Finn.] p- || (p-, f-; *p-) < [pAN] *p- || (p-, b-;[pFU] *p-) < (MP) b- ||| 3. [Finn.] v- || (v-, Ø- (= zero); *w- ~ *b$^{(w)}$-) / [Enets] b- < [pMP] *b- ||| (v-, v-; *w-) < [pAN] *w- ||| 4. [Finn.] t- || (t-, t-; *t-) < [pMP] *t- ||| 5. [Finn.] n- || (n-, n-;*n-) < [pAN] *n- ||| (n-, ny- (/ɲ /); *ń- (/ ɲ /)) < [pMP, pAN] *ŋ- ||| (?, ?; ?) / [Zyrian] ń- < [pHF] *N- ||| 6. [Finn.] s- || (s-, Ø-;s-) < [pMP,pAN] *s- || (s-, sz- (/s/); [pFU] *ś-) < [pAN] *S- / [Atayal] š- ||| (s-, ?; [pFU] [pU] *ś-) < [pAN] *C- || (s-, sz- (/s/);*ś-) < (MP) d- < [pAN] *d2- (Ross*) ; [Paiwan] z- || (s-, cs- / tʃ / ; *ć-) (before -u- or -o-) (onomatopoietic ?) < (MP) č- (< *t- ~ *s- ?) ||| 7. [Finn.] l- || (l-, l- ,*l-) < (MP) *l- ||| 8. [Finn.] r- ||| (r-, r-, [pFP] *r-) < [MP] t- /[pAN] *r- ||| 8.2. (r-, r- (?),; ?) < (MP) r- < [pMP] *R- ||| (r-, r-; [pFU] *r-) < [pW.MP][pMP] *z- (Zorc*, Coh*) ||| 9. [Finn.] k- || (k-, h- ; *k-) < [pMP] *k- ||| (k-, h- ; *k-) < [pAN] *q- || 9.3. (k-, k-; [pFU] *k-) < (MP) *g- ||| 10. [Finn.] j- || (j-, ? ; *j-) < (W.OC) y- (= j) , (W. MP) *ǰ- (< [pMP] *D-) ||| 10.2. (j-, j- ; ?) < (Sundic) *ǰ- < [pAN] *Z- ||| 11. [Finn.] h- || (h-, ?; ?) < [pHN] *h- ||| (h-, s-; [pFU] *č-) < (SND/SLW) *č- (< [pMP] *s- ? (before u, o, etc. ?)) || (hV-, sV-; *čV-) /[Votyak] ǯV- < *siV- (V: vowel) ||| (h-, ø- ;*š-) /[Votyak] š- < [pMP] *d- (= *d1-)

See http://www.tufs.ac.jp/st/personal/02/kalle/announce.html for further details and cognate-Tables.

Budapesti Iskola - ハンガリーにおけるドキュメンタリー映画の展開

高田佳代子(大阪外国語大学)

Budapesti Iskola ブダペスト派という名称は 1980 年にイタリアの映画批評家が用いた表現に始まるとされる。その主な特徴として挙げられるのが、「dokumentum-játékfilm ドキュメンタリー・劇映画」あるいは「fikciós dokumentumfilm フィクション的ドキュメンタリー映画」と呼ばれる傾向である。これは、ドキュメンタリー映画の現実認識や現実描写の可能性を尊重しつつ、同時に劇映画のフィクションへと向かう傾向であり、第二次大戦後に世界各地で起こった映画刷新の動きに連動するものである。本研究は、このブダペスト派に着目し、ハンガリーにおける映像表現のひとつの様相を提示することを目的とする。ドキュメンタリー映画は、テレビ普及以前の報道媒体として、教育やプロパガンダ、宣伝の手段として重要な役割を担っていた。しかし、これまで、個別の作品紹介や作家研究がなされてはいたものの、総合的に評価されることは少なかった。体制転換以降、映像資料の再検討が行われ、ドキュメンタリー映画も社会的・理論的に評価されつつある。今回、ブダペスト派の作品を取り上げることで、ハンガリーにおける映画の社会的機能を検証すること、また、同時代の実験映画や劇映画をドキュメンタリーの観点から考察することを試みる。

まず前提として国内の製作システムについて述べる。1950 年代後半、映画産業の組織改編によって、バラージュ・ベーラ・スタジオに代表されるスタジオでの制作が開始される。これに伴い、党の意向に基づく、組織的・計画的な映画製作に、比較的自由な制作の余地が生まれる。また、技術的な発展が、少人数と低予算、アマチュアによる制作を可能にした。

次に、「ブダペスト派」と定義づけられた傾向を検証する。その理論的なよりどころとなったのは、1969 年の「社会学的映画グループの宣言」である。制作者たちは、ありのままの現実を視覚的に記録するだけでなく、自らの社会的役割を自覚し、主張に基づいて映像を再構築していった。そして、主な対象は、小市民、ジプシー、失業者といった周縁的状況にある人々であった。

他方、劇映画において、新しいフィクションのシステムの構築を求める動きが起こる。これは現実に対する危機意識を反映しており、映像を用いて現実の隠された相貌を暴き出そうとした。このような内部検証の過程において、ドキュメンタリー的手法は一定の有効性を持つと考えられた。また、「リアリティ溢れる」映像の追究が、必然的にドキュメンタリーと劇映画の要素を併せ持つブダペスト派を生み出すこととなった。

世界のハンガリー語教育における日本、日本の外国語教育におけるハンガリー語
―――大阪外国語大学から眺めて―――

岡本 真理(大阪外国語大学)

本発表では、大阪外国語大学が 2007 年秋に大阪大学と統合するという節目にあたり、現在国内で唯一ハンガリー語を主専攻として教育する本学ハンガリー語専攻の現状と今後の問題点を紹介することを主な目的とした。

発表に際し、まず世界のハンガリー語教育について地域別に概観し、日本のハンガリー語教育がその中でどう位置づけられるかを論じた。世界のハンガリー語教育は、①大学進学や近年は市場経済化によるビジネス目的のために多様な学習者を対象とするようになったハンガリー国内の教育、②体制転換後とくに政策的に力を入れるようになった国境を接する周辺諸国のハンガリー系住民へのハンガリー語教育、③フィン・ウゴル比較言語学の伝統を出発点とするフィン・ウゴル言語圏の教育、④ハンガリー系移民や亡命者が需要と供給の双方を支える西欧やアメリカの教育、⑤その他の地域、に分けることができる。日本をはじめ韓国など極東におけるハンガリー語教育は⑤のタイプに属し、地理的・国際関係的・経済的にハンガリーとの関係が薄く、その他の地域のハンガリー語教育に比べてハンガリー本国の関心も高くない。

次に、日本の大学における外国語教育の近年の動向を踏まえ、その中でハンガリー語教育について、学生らの履修状況やアンケート結果の分析を交えて性格づけを行った。日本の外国語教育は近年、①英語の圧倒的優位、②伝統的な西欧諸語教育の衰退、③アジア諸言語の需要の高まりに特徴づけられ、、本学の副専攻語の履修状況からもこの傾向は明らかである。その中で、ハンガリー語学習への動機付けは必ずしも強くなく、入学後はモチベーションの欠如により学習意欲を低下させる学生と、一方で外国語や一般的な知的好奇心の強さからハンガリー語に「ハマる」学生との格差が激しい。アンケート結果からは、「ハンガリー語専攻を選択してよかった」と大半の学生が考えると同時に、「ハンガリー語は将来役立つと思わない」と回答する率が目立って高い。ハンガリー語が就職に直結しない不満と、ハンガリー語学習（または専攻における学生生活）への高い満足が同時に示され、専攻学生らのジレンマを表しているといえる。

最後に、国立大学法人化と大阪大学との統合という２つの大きな転機の中で、ハンガリー語教育または外国語教育に関してどのような問題が危惧されているかを紹介した。法人化により独立した経営が可能になったという建前の一方で、現実は年５％の運営費交付金削減と外部からの競争的資金や産学連携による資金獲得が必須となり、大学運営は困窮を極める一方である。ハンガリー外国人教師のための予算が国立大学時代から法人に移行しても依然として実現できなかったことは、その一つの表れといえる（ちなみに 2007 年 4 月から､暫定的に２年間の予算が確保できた)｡2007 年秋に予定されている阪大との統合では、全学一環の共通教育のために英語の第２外国語化が新外国語学部生にも課され、英語専攻

の学生までも第２外国語で英語が必修となることに象徴されるように、理系を中心とした巨大法人の中で、外大の多言語主義的な教育理念がどこまで維持できるかは疑問である。また、外国語学部の教員が阪大内のさまざまな部署へ所属が分散することにより、長期的安定的かつ質を保った外国語学部の教育ができるか、また社会科学系の教員らの多くが他研究科へ移籍することにより、外大が目指してきた言語に立脚した分野横断的な地域研究の基盤が弱体化し、語学教育のみに収束されていくことが懸念されている。

国立大学は、第１期中期計画が完遂する 2010 年には、文部科学省による業務実績評価や第３者評価機関による研究業績評価だけでなく、総務省による法人の政策評価とそれに基づいた法人事業の改廃勧告を受けることになり、今後国内のさまざまな国立大学が再編統合の道を進むのは必至と思われる。その第１号ともいえる本学の状況について、現時点で多方面の大学関係者に認識を共有してもらうことは意義があろうと思う。